

# 遊びの中で子どもは何を学んでいるのか —保育実践のビデオ映像を基に学びを深める—

高濱 正文 阿部 敬信 佐藤 慶子

What do Children Learn While Playing?:  
Intensify Learning in Childcare Using Video Imagery

Masafumi TAKAHAMA Takanobu ABE Keiko SATO

## 【要 旨】

これまで保育者養成において、学生の学びが大学における講義を中心とした基礎学習と実践経験としての実習により構築されてきたはずであるが、その学びの蓄積がどの程度、学生に養われているかについて、検証することは困難であった。保育の主体である子ども理解が基盤となって、保育実践へと繋がっていくことから、その原点である子どもの遊びから成長の道筋や援助の方法を学生が捉える視点を構築することを目的とする。

今回、保育実践のビデオ映像を学生に視聴させ、子どもの遊びの場面において、行動や言動から子ども理解を深めることを目的とし、考察を繰り返し、その有効性を検証し、保育者養成の一助となる研究を模索する。

## 【キーワード】

保育実践 子ども理解 ビデオ映像 遊びの意義 コミュニケーション能力

## 1. はじめに—問題の所存

保育所保育指針においては、保育所職員の資質向上について倫理観、人間性そして職務及び責任の理解と自覚を基盤とした保育の専門性の向上に努めることが明確に述べられている<sup>1)</sup>。とりわけ、保育の専門性の向上については、「保育所全体の保育の質の向上を図るため、職員一人一人が、保育実践や研修などを通じて保育の専門性を高めるとともに、保育実践や保育の内容に関する職員の共通理解を図り、協働性

を高めていくこと」と示されており、専門性向上のために、保育実践と研修によることが明確にされている<sup>2)</sup>。

一方、子ども・子育て支援法の施行を控え、幼保連携型認定こども園の拡充、小規模保育や家庭内保育の新設など保育サービスの量的拡大を受け、保育の質の保障も大きな問題となっている。つまり、保育実践を問い直し、保育の質の向上に繋がる研修の在り方が今まで以上に強く求められている<sup>3)</sup>。

当然、それは保育士養成を担う機関においても、保育の質を担保できる人材育成を図ってい

く上で、今まで以上に求められることである。

保育現場において、保育の質の向上を図るための専門性の研修については、保育所保育指針解説においては、「研修内容と研修方法」の「職場内研修の実際」に、いくつかの具体的な研修方法の一つとして「既存の記録・資料を活用しての研修」が挙げられている。「短時間で効率的に職場内研修を行うためには、具体的な資料をもとに検討することが大切」とし、「資料は、日常的に記録している保育日誌、連絡帳、児童票などを資料として活用することも有効」であり、「ITを効果的に活用して効率化を図ることも必要」と述べている<sup>4)</sup>。

近年このような「職場内研修」ではビデオ映像を用いて研修を行うことが増えている。「職場内研修」の一貫として保育カンファレンスが行われることも多いが、保育カンファレンスにおいてビデオ映像を用いて検証することの有効性について大豆生田<sup>5)</sup>が指摘しているところである。中坪は「近未来の保育所、幼稚園、小学校では、日常的に映像を介して保育者・教師が語り合い、実践力の向上を検討し合うスタイルが定着」するかもしれないと述べている。そして、「映像を介してその子の「今、ここ」を語り合う」と題して、「子ども理解の方法としての映像実践」の可能性を追究している<sup>6)</sup>。また野口は、ビデオ映像を教師が読み取り、コメントを発することによって、第三者が知ることができない教師のもつ暗黙的实践知を明示することが可能になり、語りとして教師の实践知が可視化されるとしている<sup>7)</sup>。

このようにビデオ映像を用いた保育カンファレンスなどの保育現場における研修や保育実践研究が保育の質を向上させるために有効であることが繰り返し示されている。

もちろん、今まで、保育者養成を行っている本学の授業においても、保育におけるビデオ映像を基にした授業をこれまで実施してきたが、それは映像の中で展開される子どもの姿や保育者の援助や配慮を解説するものであった。保育者になるための実践力を高める場である実習においては、目の前で保育実践が繰り広げられ、

日々、様々な子ども達の姿に出逢うことになる。そして、そこでの保育者の言葉かけや配慮というものに着目し、実習日誌などに記録することで、学生が保育実践の中での子ども理解を図ってきたといえる。

保育の根幹をなす子ども理解というものが、そのような大学での授業や現場での実習というものによって、どれほど高め、深められてきているのかについては、今まで詳しく追究できていなかったといえる。当事者である学生自身が、自分たちがどこまで子ども理解、保育理解ができているのか、それを自覚的に検証することは実質難しい。しかし、子ども理解なくしては、子どもを主体とした保育は実践できない。そこで、質の高い保育者を養成するために、実際のビデオ映像を基に子どもたちの姿や保育者の援助などを詳細に分析することをとおして、学生が子ども理解を深めることができるのかを検証することを目的として行う。

## 2. 研究方法

本研究は初等教育科1年生77名の学生を対象とした。ビデオ映像は2014年9月にH保育園で撮影した4歳児の遊びの場面とした。

対象となった学生は、ビデオ映像の保育実践事例を視聴し、ワークシートにある(課題)の指示に従って記述する。

### 【事例：ごっこ遊びからの展開(4歳児)】

H保育園の4歳児女児2名が園庭でのごっこ遊びに始まり、他数名の男児とも遊びを展開していく過程の中で、その女児2名のそれぞれの行動や発言から、対象児の気持ちや行動の意味を読み取り、様々な観点により子ども理解を深めていくことを目的とする。手順については以下の通りである。

#### (1) 全体映像を視聴

(課題1) 1回目は、特に視聴観点を指示せず、遊びの場面(12分)を見て感想や気づいたことを記述する。

## (2) 場面ごとに視聴観点を踏まえ考察

各場面（場面①から場面⑥）において、観察観点を把握した上で視聴し、そのポイントを記述する。その上で観点に関する解説を聞き、再度、視聴しながら確認、考察を行う。

### 場面①：対象児 A 児に焦点を当てる

（課題 2）ごっこ遊びが始まり出す場面における対象児 A 児に着目し、その行動や発言から A 児の性格や対象児 B 児に対する気持ちを読み取り記述する。

（場面①：内容）A 児、B 児と共に男児 2 名が一緒にごっこ遊びをやるという展開になり、A 児がイメージするごっこ遊びに対して、男児は違う設定を提案するが、A 児の思いとは違うため、A 児は男児 2 名とは離れて行こうとする。B 児は赤ちゃん役になりきりながらも、撮影のカメラに興味を示したり、A 児の思いとは違う動きをするため、次第に A 児の表情が変わり、B 児に対する発言も「なんで逃げるん?」「やめなさい」と少し否定的なものになっていく。



図 1 場面①ごっこ遊び（1）

### 場面②：対象児 B 児に焦点を当てる【1】

（課題 3）次の場面においては、対象児 B 児に着目し、ごっこ遊びの展開の中で、A 児との関わりから B 児の行動や発言による気持ちの変化を捉え、記述する。

（場面②：内容）A 児と B 児は一緒にごっこ遊びを続けるが、次第に B 児の気持ちが A 児から離れ、手を繋ごうと A 児が手を差し伸べ



図 2 場面②ごっこ遊び（2）

るが、B 児は A 児と一旦、手を繋ごうとするが、繋がずにそのまま去っていく。それに対して、A 児はごっこ遊びの役になりきりながらも、B 児に対して戻ってくるように訴える。A 児がジャングルジムの所に行った時に、B 児もジャングルジムに戻ってきたが、一人で登ろうとする B 児を A 児は引っぱり降ろし、文句を言うことで B 児は離れていく。



図 3 場面③ジャングルジムにて

### 場面③：対象児 B 児に焦点を当てる【2】

（課題 4）その後の場面においても、B 児が一人ジャングルジムの上で、A 児の様子をじっと見続けるシーンがあり、その場面での B 児の気持ちを省察し、記述する。

（場面 3：内容）A 児が男児と遊んでいる様子をジャングルジムの上から凝視する B 児。決して視線をそらすことなく、A 児の遊んでいる姿を見続けている。

### 場面④：保育者に焦点を当てる

（課題 5）一人ジャングルジムにいる B 児に対して保育者の関わりから、その配慮を読み

取り、記述する。



図4 場面④保育者の関わり

(場面4：内容) 担任保育士が男児と追いかっけこしながら、ジャングルジムの上にいるB児に向かって手を振った後、ジャングルジムの周りを男児と楽しげに走り回る。B児の視線が自然と保育士と男児に注がれる。

#### 場面⑤：対象児B児に焦点を当てる【3】

(課題6) 戸外遊びから室内へと移動する過程でのB児の行動からA児に対する気持ちを考察し、記述する。



図5 場面⑤朝顔の観察とうがい

(場面5：内容) 室内に戻ることになり、ジャングルジムから降りたB児。保育士やA児と共に部屋に戻る前に朝顔の種をみんなで観察する。A児が移動すると、それを追うようにA児の隣へ移動するB児。朝顔の観察を終え、平均台に登って移動するA児の腰にそっと左手を添えるB児。

部屋に戻って、手洗い場でうがいをする際にも、当初、男児を挟んで並んでいたが、男児が

うがいを終え、抜けると二人きりとなる。うがいをしながらも、B児はA児を一瞬、横目でちらっと見て様子を伺う。しかし、A児はうがいを終わると、B児を気にすることなく、手洗い場から移動する。

場面⑥：対象児A児及びB児に焦点を当てる(課題7) 室内でのパズル遊びにおいてのA児及びB児の行動や発言から両児の気持ちを考察し、記述する。



図6 場面⑥パズル遊び

(場面6：内容) うがいの後、机で一人パズルをするB児の横に、別のパズルを持ってA児が着席するが、その位置がB児から離れている。A児はパズルのケースをB児が置いているパズルケースの隣に置く。もともとパズルケースとふたを別々に置いていたB児は、ふたの上にパズルケースを乗せ、一度、A児が置いているパズルケースの横に移動させるが、すぐに戻して、A児のケースから離して置き直す。その後、A児は歌を一人口ずさむが、B児は全く反応を示さない。A児はさらにB児に語りかけるかのように独り言を言うが、それにもB児は反応せず、見ることも語り掛けることもしない。やがて、別の歌を口ずさむA児に対して、B児も同じ歌を一緒に口ずさみ出す。それに気づいたA児は、B児に「最初から、一緒に歌おう」とはっきりと自分の思いを伝える。すると、同じ机に別の女児が製作をしようとカップの容器を置き、何か取りに行くため、机から離れると、その容器を持ち、「何これ？」と顔に当て、B児の気を引こうと笑顔で、

B 児の方へ放り投げる。容器は、B 児のパズルケースに入ってしまう、怒ったB 児は容器を取り上げ、放り投げた後、さらにその容器を手で押し出す。それを見たA 児はまた容器を取り上げ、B 児に向かって投げ返すと、B 児はA 児に向かって、「何でそんなことするん」と憤慨する。

(3) 学習の深まりを確認する

(課題8) 特に視聴観点を踏まえずに視聴した場合と観点を意識して、視聴した場合との考察、分析、理解の違いについて、4段階 (A: とても変わった B: 少し変わった C: 分からない D: 変わらない) で自己評価を行い、「保育実践を見ていく上でのポイント」として、学習したことを記述する。

このようにして各場面において設定した課題を受けて、学生がワークシートに記述した内容について、ビデオ映像を特に観点の指示を受ける前に視聴した際の記述と観点の指示を受けた後に視聴した際の記述の比較を行うことによって分析する。

3. 結果

各場面において設定した課題に関する記述の一部を抜粋し、それを元に、学生が保育実践の中での対象児の気持ちや行動の意味をどのような視点で捉えているかを分析した。その結果を次に記す。

(課題1)

事例についてまずは、特に観点を指示せず視聴した上で記述された内容(表1)が以下の通りである。

表1 視聴観点を提示しなかった考察

<p>A 児の性格について</p> <p>①支配欲が強い</p> <p>②攻撃的</p> <p>③リーダーシップがある</p> <p>B 児の性格について</p> <p>④おとなしい</p> <p>⑤気が弱い</p> <p>⑥人を見て行動できる</p> <p>二人の関係性について</p> <p>⑦二人は対照的で面白かった</p> <p>⑧A 児はちょっと意地悪を試みたり、構ってほしい</p> <p>⑨B 児は途中で疲れていた</p> <p>⑩B 児は不満そうだった</p> <p>⑪B 児が可哀そう</p> <p>その他</p> <p>⑫B 児は自分の気持ちをちゃんと持っている</p> <p>⑬同じ動きをしたり、遊んでほしいということを言葉ではなく態度で表していた</p> <p>⑭この歳は一定の友達と一緒に遊ぶ習慣がついている</p>
---

A 児について①②など性格について否定的な見方をする一方で、③のような肯定的な見方もされている。B 児についても同様に、④⑤ではB 児を内向的な性格の持ち主として捉える側面と、⑥は周囲の状況を捉える力があると考察している。いずれの場合も、同じ姿を見ても、学生によって、子ども自身を肯定的な捉え方をする者と否定的な捉え方をする者とで違いが生じている。この課題1において、映像すべてを視聴した上での考察内容のうち、全体の70%が対象児二人の性格について記述している。それ以外では、二人の関係性に関する⑦～⑩の記述のようにそれぞれの思いを推察するものも一部には書かれており、中には⑪のB 児に対する自分の感情が書かれたものもあった。

その中でも、⑫⑬のように、対象児の内面の心の動きやそれに伴った態度を捉えたものや、⑭は年齢に応じた発達段階を捉えた記述もある。

(課題2)

場面①の事例冒頭のごっこ遊びが始まり出す過程で、B 児や男児がA 児の思い通りに行動しない場面について、A 児の気持ちを省察す

るように観点を指示した上で、二度目の視聴を行った。

表2 A 児の気持ちや行動の考察 (場面①)

<p><b>B 児に対する気持ちについて</b></p> <p>①A 児は B 児が大好き</p> <p>②B 児を独り占めしたい</p> <p>③言うことを聞いてほしい</p> <p><b>A 児自身について</b></p> <p>④お母さんという役割をしっかり守って演じようとしている</p> <p>⑤A 児は遊びを楽しみたい</p> <p>⑥4 人をどうにかまとめたい</p> <p>⑦自分の中で役割を分担しているから乱されたくない</p>
---

観察対象を A 児に絞り、二度目の視聴をおこなった結果 (表2)、①～③のような A 児の B 児に対する思いに焦点を当てた記述と、④～⑦の A 児自身が遊びに対してどのような思いで取り組んでいるかといった A 児の姿に対する記述が記されていた。

表3 解説後の A 児に関する考察 (場面①)

<p><b>A 児の行動について</b></p> <p>①手の繋ぎ方が、腕を掴むことになった点から、自分の言う通りにしてほしい気持ちが強く出ている</p> <p>②口元を見ただけでどう思っているのか何となく分かった</p>
---

さらに解説として、A 児の気持ちを推測する上で表情や手の動きに注目するという視点を提案し、三度目の視聴をした結果 (表3)、対象児の心の動きを手の繋ぎ方や口元といった詳細な部分から捉えるという新たな視点が加わった。

(課題3)

場面②で、一緒に遊んでいた対象児二人の距離が次第に離れていく際の B 児及び A 児二人の気持ちに焦点を当て、推察するように指示した結果が表4である。

表4 B 児及び A 児に関する考察 (場面②)

<p><b>B 児の気持ちについて</b></p> <p>①自分のやりたいようにしたかった</p> <p>②一緒に遊びたいが面倒くさい、つまらない、怖くなった</p> <p>③もっと構ってほしい</p> <p>④違う遊びをしたかった</p> <p>⑤一人で遊びたい</p> <p><b>A 児の気持ちについて</b></p> <p>⑥自分の言うことを聞いてくれないので、不満</p> <p>⑦B 児の気持ちを取り戻したい</p> <p>⑧もういいと諦めている</p> <p>⑨怒って聞かせようとしている</p>
---

A 児と共に遊びたい思いはあるものの、B 児自身が自分の思うようにならないことに対して不満を持っているという捉えや、A 児とではなく離れて違う遊びをしたいという B 児の気持ちを捉えている意見があった。

一方、A 児の気持ちは⑥～⑨にあるようにかなり捉え方にばらつきが見られた。

表5 解説後の A 児に関する考察 (場面②)

<p><b>A 児の行動について</b></p> <p>①その役になりきって、「こんにちは」と反応を見ながら言い方を変えている対応がすごい</p> <p>②「こんにちは」と言ったが、返事が返って来ないため、「帰るよ」とトーンが下がって、気持ちの変化が見られた</p>
---

解説では、まず、A 児が差し出した手に、B 児が一瞬繋ごうとするが、すぐに振りほどいて去っていく場面について説明したが、その点よりも、一度、距離が離れてしまった際、B 児に対して、「こんにちは」と優しい口調で話しかけた A 児について、①は遊びを継続しながらも、B 児へのアプローチの仕方を模索している姿と捉えていた。②は、言葉の変化から A 児の内面の気持ちの変化をビデオ映像の場面から捉えていた。

(課題4)

場面③のジャングルジムの上で一人 A 児を見続ける B 児の心境をどのように捉えている

かは表6の通りである。

表6 B児に関する考察(場面③)

<p>B児の気持ちについて</p> <p>①向こうの方が楽しそうだな</p> <p>②違う子と遊び出して寂しい</p> <p>③A児を怒らせてしまって、どうすれば許してくれるかな</p>
---

①②のA児が他児と遊ぶ姿をジャングルジムの上から眺め、羨ましがっている姿、寂しい思いをしていると捉えている意見と、③はA児との関係をどう修復しようかと困惑している姿として捉えている見解とに二分されていた。

解説の中で、B児がA児と一緒にではなく、何か違う遊びをしたかったとするのであれば、ジャングルジムの上でじっと動かずにA児を眺め続けることはしないのではないかと再度、学生に問い直した。

表7 解説後のB児に関する考察(場面③)

<p>B児の気持ちについて</p> <p>①B児はA児と遊びたくなかったわけではない</p>
--

その結果(表7)、①のようにB児の思いを捉えた意見があった。しかし、この場面ではB児の動きがほとんどないことから、記述がない学生もいた。

(課題5)

場面④では、対象児ではなく、保育者がジャングルジムの上にいるB児に対して、手を振り、ジャングルジムの周りで他児と追いかけてくる行動は何等かの役割を果たしているのかという設問を設定した(表7)。

表8 保育者の行動に関する考察(場面④)

<p>保育者の行動について</p> <p>①B児を遊びに誘っている</p> <p>②気を引こうとしている</p> <p>③傍にいて安心させている</p> <p>④見守っている</p> <p>⑤見ているだけでも楽しめるようにしている</p> <p>⑥A児も誘っている</p> <p>⑦周りに人を集めようとした</p> <p>⑧他の子に対してBちゃんに気づくようにした</p> <p>⑨役割は果たしていない</p> <p>⑩気にかけていない</p> <p>⑪直接、声をかけていない</p> <p>⑫もっとB児に声かけをすべき</p>
--

多数の意見は①②にあるような直接的な援助と捉えているが、中には③④⑤といった間接的援助として捉えているものもあった。また、⑥⑦⑧のように対象児ではなく、他児に対してのアプローチと捉えている見解もあった。一方で、⑨～⑫のように保育者の行動は特に役割を果たしていないという意見やもっと積極的な声掛けをするべきであったという意見も少数ながらあった。

(課題6)

場面⑤では、部屋に戻るよう促され、ジャングルジムから降りてきたB児は、部屋に帰る前に朝顔の種を見る際の姿から表9のような見解が記述されていた。

①②のようにB児は、A児がまったく見向きもしない姿に対して、不安な思いを抱いていると推察していた。また、朝顔観察時にA児が移動する度に、B児も移動する姿を捉えていた。さらに、④⑤は、A児が平均台に登って移動しようとした後ろから、B児の左手がA児の腰に手を添える姿から、その行動の意味を解釈していた。

表9 B児の行動に関する考察(場面⑤)

<p>朝顔観察時のB児の行動について</p> <p>①B児はA児を怒らせてしまったと不安になっている</p> <p>②A児に対して見てほしいが見てもらえず寂しい気持ちになっている</p> <p>③後を追っている</p> <p>④何かきっかけをつくらうとしていた</p> <p>⑤触れて話したい</p> <p>うがいの時のB児の行動について</p> <p>⑥うがいをしながら、タイミングを合わせようとしていた</p> <p>⑦A児を一瞬、横目で見ている</p>
---

部屋に戻って、手洗い場でうがいを並んですることになった場面については、⑥⑦のようなB児の心情を推察しようとしていた。

(課題7)

場面⑥では、室内でパズルをする場面での二人の行動と気持ちを表10のように捉えていた。

表10 A児とB児の行動に関する考察(場面⑥)

<p>A児の気持ちについて</p> <p>①パズルの箱をB児の近くに置くことで心の距離を近づけようとしている</p> <p>②歌を歌ってB児の気を引こうとしている</p> <p>③気を引こうとしてもA児は自分のことを無視するので、B児も仕返しをするように何を言われても答えようとしない</p> <p>④仲を取り戻そうとしている</p> <p>⑤素直になれないから近くにあってお皿を投げてみた</p> <p>⑥B児は見てくれず、少し嫌な気分になり投げつけた</p> <p>⑦「これなんだろう」と言ってB児と気持ちを共感したい。話したい。遊びたい</p>
---

パズルをするために机に座るA児の姿から、①②は、A児がB児に対して、アプローチしている姿を捉えていた。その一方で、③は“仕返し”という表現でB児の思いが態度に出ていると捉えている意見もあった。

次の展開として、A児が口ずさんでいたところに、B児も一緒に歌い始めたことについては、④にあるB児の気持ちの変化が現れはじめたという意見があった。

その後、A児が他児の持ってきた容器を手に取り、それをB児の方へ投げた行為については、⑤～⑦で素直になれないA児の内面を捉える見方と、B児との関係を修復したいという思いで容器を投げたという捉え方をしている意見もあった。

以上が、各場面の中でのA児、B児に関する行動や言動からの学生の記述について分析した考察の結果である。

次に、観点の指示を受ける前と、観点の指示を受けた後に、それを意識して見た場合とで、自分自身の子どもの姿の捉え方の変化を「A：すごく変わった」「B：少し変わった」「C：よく分からない」「D：変わらない」の4段階で自己評価を行った。その結果、「A：すごく変わった」という意見が46名(60%)で「B：少し変わった」が31名(40%)であった。そして、「C：よく分からない」と「D：変わらない」はいずれもいなかった。

また、最終的な総まとめとして記述されていた内容(表11)は以下の通りである。

表11 総まとめの中の子ども理解についての考察

<p>子ども理解について</p> <p>①深いところまで見れていなかった</p> <p>②改めてどれだけ自分が子どもの行動をしっかりと見ていなかったのかを感じさせられた</p> <p>③行動を見て、気持ちを読み取ることで性格や個性が分かる</p> <p>④表情や一瞬の視線の移り変わりでも複雑な心情を読み取ることができる</p> <p>⑤ほんの少しの仕草や行動を見逃さないこと</p> <p>⑥友達関係はこんな小さな子どもでも難しいんだと思った</p> <p>⑦子ども達も必死に人間関係を保とうとしている</p> <p>⑧一人一人の個性や性格など理解し、ちょっとした一言や行動をしっかりと見て援助すること</p>
--

まず、これまで自分自身が子どもを理解することの観察力不足を感じているという①②の自己評価や、③～⑤の子ども理解を深めていくためには、子どもの様々な姿や言動をより詳細に観察、考察することの重要性について述べられていた。



表12 総まとめの中の保育者に関する考察

<p>保育者について</p> <p>①一人一人の個性や性格など理解し、ちょっとした一言や行動をしっかり見て援助すること</p> <p>②どんな時にも必ず保育者に必要なのは子どもの気持ちを考え、理解して、いいサポートをすること</p>
--

さらに、表12に記述されている内容として、保育者に求められている子ども理解の必要性などが捉えられていた。

今回の研究方法に関する記述は表13の通りである。

表13 ビデオ映像による研究方法・内容について

<p>研究方法・内容について</p> <p>①映像を見ると写真では分からない動きや表情が見られて、子どもの気持ちなどが理解しやすい</p> <p>②ポイントを聞いてから見ると感じ方、捉え方が変わっていき、いろいろな事に気づき、学ぶことができた</p> <p>③いろいろな複雑な思いなどが読み取れてとてもおもしろかった</p> <p>④自分が意識を変えて見てみるだけで全然違って見える</p> <p>⑤少しずつ映像を止めて、解説を区切れ、区切れで聞くことでより子どもの様子や自分が気付かなかった所まで知ることができた</p> <p>⑥解説を聞いて、もう一度見るといろんな視点から見られるようになり、どんどんイメージが広がる</p> <p>今後に向けた取組について</p> <p>⑦実習などに行く時にもう少し細かい所まで意識してみよう</p> <p>⑧保育の場では、止まることなく出来事が流れていくので、場面場面で臨機応変に対応していかないと駄目だ</p> <p>⑨もっとみんなの意見が知りたいので意見を出し合う形でもやってみたい</p>
---

本研究の方法と内容に関して、保育実践をビデオ映像を基に、自分なりに考察することから、さらに観点を意識し、解説も踏まえ、繰り返し視聴できることによる成果を感じるコメントが記述されていた。

今後のこととして実習での心構え等、将来を見据えた見解が記されていた。さらに、新たな提案としてディスカッションを取り入れて考察

を深めていくという要望もあった。

#### 4. 考察

今回は研究対象として、これまで子どもと直接関わる経験としての実習をまだ一度しか体験していない1年生としたが、それだけに、映像を見て捉える視点が人によって違い、気づける部分に個人差が見られた。ビデオ映像を基に子どもの気持ちを読み解いていくポイントとして、表情や言動、行動をどう捉えるのかがこの研究の検証したい事項であった。

課題1としてまず、事例映像を一度にすべて見せた場合、どのような点に着目し、子どもの姿を理解するのかということが、第一段階としては、興味深かった。その際、事例の内容の中で、特に見る観点を指示せずに視聴させたが、総まとめにも記述されていたように、細かい動きまで捉えられていなかったり、見る視点が対象児の性格を捉えたものだったりと表面的な気づきであった。これまでの実践経験が少ない1年生にとっては、子どもを見る視点が、総合的な捉えでしかなく、概略的な考察しかできないことは予想されていた。その後、事例映像を分割し、その場面ごとの観点や対象者を明確にすることで視点が定まり、より細かな動きや表情に着目するよう促すことにより、その動きにはどのような子どもの内面が表れているのかについて、考えるようになった。一見すると何の意味も持たないような動きですら、そこには子どもの思いが表れていることがあるという説明を加えることにより、一挙手一投足を観察するという視点をもつことができ、その意味を考えようとする姿勢は感じられた。さらに解説として、見落としている一瞬の動きや言葉のニュアンスに触れ、再度、映像を見ることにより、気づきの深まりが生まれた。繰り返し視聴可能なビデオ映像の視聴だからこそ、できることであり、それは、日常の保育においては、止めてじっくりと観ることはできないし、巻き戻すことができないものである。ビデオ映像の視聴だからこそできることを理解したことで、日々の

保育で子どもの細かい行動や言動の意味を捉えることの難しさを実感しているコメントがあった。場面③のように、さほど動きがない部分では、その姿から内面を読み取ることは簡単ではないが、それだけに推察する視野が広がり、様々な角度からの視点で、気持ちを読み取ろうとしていた。そのため、一つの姿でも、考察の内容が反対の見解を示すこともあった。それだけやはり動きの少ない姿からは、明確に子どもの心情を捉えることが容易ではないことが推察される。また、映像編集の関係もあり、その動きの少ない静止状態がどれくらい続いていたのか、また、その場の雰囲気を読むことは、やはりなかなかビデオ映像では捉えることは難しい。実際にその場にいることにより、対象児双方の間で醸し出される空気を考察のひとつとして、双方の思いを感じ取ることもできるのではないだろうか。

次に、観点を意識して視聴し、解説や問いかけを踏まえ、再度、視聴することを繰り返していくうちに、後半は、学生自らが、観点を先に意識して見ていく展開へと変化している。最後の場面まで確認し終えた段階で、特に観点の指示を受けることなく見ただけの時と、観点の指示を受けた後に観点を意識して、子どもの姿や言動を捉えることについては、今回の調査では、全員が変わったと自己評価している。どういう視点で子どもの内面を捉えていくのかということに関して、その表情や目、手の動きなど微細な変化にも着目することにより、考察が可能であることに気づくことができたコメントが多数あった。ビデオ映像の視聴であるからこそ、何度も繰り返し観察が可能であり、複数回確認することにより、見落としていたしぐさなどを発見できるということもこのビデオ映像分析のメリットである。

しかし、課題としては、推察した子どもの内面を本人に確認することはできないため、憶測に過ぎない。ただ、保育者の行動の意図するところに関しては、担任保育士に確認することはできるため、今後、その検証を行う必要がある。また、ビデオ映像を担当保育士には視聴し

てもらってはいないので、日頃の対象児の姿や二人の関係性、他児との関わりなどについても、意見を聴取することで、さらに深い考察が行えるものと思われる。

中坪は、ビデオ映像を用いることで、ともすると見過ごしがちな何気ない場面から重要な意味を発見したり、子どもの言動の背後を解釈するための手がかりをもたらせてくれたりすると、ビデオ映像の利点を述べているが、一方で、「見る側」の人々が提示された映像を「真実」として捉えてしまい、「視られる側」の真実よりもビデオ映像を絶対化した「揺るぎない証拠」として「視られる側」に突きつけてしまうことが考えられるとしている<sup>8)</sup>。このようなことを防ぐためにも、少なくとも、担当保育士とともにビデオ映像を視聴することをおして意見聴取することは必要であると考えられる。

## 5. 今後の課題

今回は実習経験が浅い1年次を調査対象としたが、同様の事例研究を2年次にも実施し、その捉え方などに差異があるのかについて、検証を行う必要がある。もし、仮に差異が生まれたとするならば、どのような要因によって、その差異が生じたのか、それらをさらに探究することが、新たな学習支援の手がかりとなるであろう。また、今回の対象学生にさらに別の事例映像を視聴させ、今回の事例観察結果と違いが見られるか、実践の内容によって、捉える力量に違いがあるのかについても検証していきたい。

実践を捉える観点が、保育内容の各領域とどう関連しているのか、一つの実践を紐解いていく過程で、健康・人間関係・環境・言葉・表現という視点で考察していく取組も試みたい。この取組により、保育が各領域を中心として、相互に、複合的に折り重なって展開されているということへの理解へと結びつくことを目的とした。

研究素材としての映像収集の技術的課題としては、子どもや保育者のありのままの姿の撮影を実現するためには、対象者と一定の距離を保

ちながらの撮影を余儀なくされているが、子どものつぶやきや保育者の言葉かけを集音するには、現状では不十分である。そのために、より、詳細な心の動きや保育者の意図する援助が確認しづらい。その改善策としては、ワイヤレスマイク機能を使用し、保育者の腕などに装着した上での撮影を行うことで、それらの課題の解消が見込まれる。

また、学生のみならず、現場の保育者の実践研修として、これらの映像をビデオ・カンファレンスの資料として活用することを提案したい。

岡花・杉村ら<sup>9)</sup>によるビデオ・カンファレンスの研究においても、保育者は、当事者であったとしても、その出来事の全ての意味を詳細に理解しているわけではないと指摘している。それゆえに、ビデオを通して、客観的に当事者である担任保育者が自らの保育実践を振り返ると共に、いろいろな保育者が様々な視点から意見を出し合うことで子ども達の姿を受けて、保育実践へと展開していけるようになることを提唱している。

さらに、我々、研究者として、保育実践に関する研究を進めていく上では、保育者と子どもの姿をどう分析していくかが重要である。柴崎ら<sup>10)</sup>は保育の状況性や関係性に着目しながら、保育者のかかわりの背景にある枠組みを、子どもの姿とすりあわせて検討することが、保育者の保育行為の判断の根拠を検討することになると述べている。ビデオ・カンファレンスを活用し、保育者自身がこれらの検証を有効に行える一助となるように研究を進めて参りたい。

さらに、現在、東北福祉大学の和田らによって開発された「保育コンテンツマネジメントシステム」<sup>11)</sup>は、保育実践事例のビデオ映像をコンテンツとしてアップし、その検証を学生の子どもの理解や保育者の役割等について学ぶことができるE-ラーニングシステムとしての能動的学習方法として活用の可能性を十分に秘めていると考えられる。学生自身が実践の知を収集、編集することにより、保育実践を可視化し、さらに言語化することは、そのプロセス自

体が学びとなる。また、保育者や地域子育て支援担当者、栄養士等、エキスパートがこのシステムに参画することにより、保護者に対する子育て支援システムとしても、子育てに対するポジティブな意欲の喚起につながる有効なコンテンツとなりうる。また、保育現場と保護者の相互理解やコミュニケーションの向上も期待される。

本研究を深化並びに進化させていくには、まず、素材となる保育実践映像を収集すると共に、その内容を精査し、システム自体の構築をさらに推し進めていくことが求められる。そのためには、保育現場の協力はもとより、その実践を多面的な角度から考察、助言を行うための研究者等、有識者の協力も不可欠である。今後、これらの研究の可能性を様々な場面で提案し、より広汎な研究となるように努める必要がある。

しかし、これらの素材となるものには、個人情報など慎重に取り扱わなければならない性格のものであるため、その点に十分に配慮した上で研究を進めていかなければならない。

本研究が、保育者養成の新たな方向性として、より可視化されたものをベースに、具体的な保育実践事例を基に、保育学生の子どもの理解のみならず、保育者の役割や援助方法を継続的、反復的に考察、検証していくことを試み続けたい。また、保育現場の理解、協力のもと、保育実践の質的向上へとも繋がるよう、より密に連携していくことが併せて求められる。

## 6. おわりに

本研究は、質の高い保育者を養成するために、実際のビデオ映像を基に子どもたちの姿や保育者の援助などを詳細に分析することをおして、学生が子ども理解を深めることができるのかを検証することを目的として行われた。

実際の保育実践のビデオ映像の視聴をする際に、子どもの表情や細かな動きに着目するといった場面の観点を指示することによって、学生は見落としていた子どもの一瞬の動きや子ど

もが発する言葉のニュアンスに触れることができるようになり、再度、映像を見ることにより、気づきの深まりが生まれた。

保育実践の全てを映像と音声という記録に残せ、さらにそれを繰り返し視聴できるといったビデオ映像の利点を生かすことにより、保育実践に対する暗黙的实践知を明示することが可能になり、保育者の実践知が可視化される。保育者養成の授業の方法としても有効であることを実証的に示すことができた。

今後、より多くの保育実践者、有識者、子ども、学生の連携のもと、ビデオ映像の活用をした保育者養成や保育現場における保育カンファレンスを進めていくことでより有効な知見を明らかにしていきたい。

### 【謝辞】

本研究にあたって撮影にご協力頂いたH保育園の先生方、並びに園児に対して、心より感謝申し上げます。

### 【参考文献】

- 1) 厚生労働省、保育所保育指針（平成20年告示）、2008、フレール館。
- 2) 厚生労働省、保育所保育指針解説書、2008、フレール館。
- 3) 野本茂夫、保育実践を振り返る（総説）、保育学研究、47（1）、2009、8-11。
- 4) 前掲2）。
- 5) 大豆生田啓友、保育カンファレンスにおける語りとビデオ撮影者の立場から、発達、68、1996、17-22、ミネルヴァ書房。
- 6) 中坪史典、子ども理解の方法としての映像実践、子ども理解のためのメソドロジー—実践者のための「質的实践研究」アイディアブック、2012、73-84、ナカニシヤ出版。
- 7) 野口隆子、多声的ビジュアルエスノグラフィーによる教師の思考と信念研究、事例から学ぶはじめの質的研究法—教育・学習編、2007、296-317、東京図書。
- 8) 前掲6）。
- 9) 岡花祈一郎・杉村伸一郎・林よし恵・松本信吾・久原有貴・日切慶子・落合さゆり・山元隆春、森の幼稚園カリキュラム作成にむけたビデオ・カン

ファレンスの試行、学部・附属学校共同研究紀要、39、2010、165-170、広島大学学部・附属学校共同研究機構。

- 10) 柴崎政行・田代和美・大場幸夫・金澤妙子・河邊貴子・戸田雅子、自主シンポジウム7「保育実践」にかかわる研究的創造の可能性—「私」の保育理論へのまなざし、日本保育学会研究大会論文集、S14-S15、1998。
- 11) 和田明人・君島昌志・青木一則、保育者養成におけるアクティブ・ラーニング、東北福祉大学研究紀要、37、2013、57-71。